慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』 (第四～六章) (翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt, Madame Gervaisais (chapitres IV-VI), (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.75 (2022. 10) ,p.231 (10)- 240 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20221031-0231

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

 この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』（第四～六章）（翻訳）

山本武男

訳者まえがき

『ジェルヴェゼ夫人』（一八六九年刊）はゴンクール兄弟が兄弟で共作した最後の小説である。弟ジュールが四十歳を前にして病歿した為である。その後、兄エドモンは一人、作家生活を続けて行く。本作はパリの貴婦人である主人公が、幼い息子と一緒にローマを訪れスペイン広場付近の部屋を借りて生活を始めるところから幕が開く。或る事情があって、彼女はカトリック信仰の中心地に身を寄せた。女中を含む三人での暮らし。三人の異国での日常の、色鮮やかな描写の中には、実際に兄弟が現地で取材したローマの風光が色濃く感じ取られる。軈て物語は、近代社会に於ける信仰の危機の問題へと傾斜して行くが、序盤ではまだ何処か物悲し気ながらも穏やかな三人の日々が綴られて行く。『ジェルヴェゼ夫人』は、ゴンクール兄弟の小説らしく、ステレオタイプを避け、

掛け替えのない一瞬一瞬を捉え、読者の五感を刺激する独自の描写法を駆使しつつ、近現代人の精神と近現代社会の諸相に見られる危機的状況を抉って見せた、現代を生きる我々にも強く訴え掛けて来る、先駆的な問題作である。

〔翻訳〕

四

午前の眠気の中で、光や温かさが顔に掛かるのを、ジェルヴェゼ夫人は感じた。それらは、閉じた瞼を、それが作り出す闇の中で心地よく刺激して来て、軽い眩暈（めまい）を思わせた。

瞼を開けた。するとしっかりと閉じられていない鎧戸から差し入る光線が身に掛かり、片方の耳はすっぽり日差しを浴びているのが分かった。

寝台を抜け出ると、生きる喜びの中でのこの新たな目覚めに幸福感を覚えたが、それは朝の陰鬱なパリ生活では殆ど馴染みのないものだった。軈（やが）て部屋着を肩にかけ、窓を大きく開けると、晴れた日のローマの空を眺め出した。青空、そこには、何時いつ迄も晴天が続くかと思わせるものがあった。青空、この軽やかで、やさしく、乳白色の混ざった青色は、水彩画にグワッシュが齎す色を思わせる。限りない青空に雲はなく、その僅かな名残りも、その兆しすらもない。深く透き通った、天空高く突き抜ける様な空。南欧の海面に揺蕩（たゆた）う無限の透明感、

水面に接する蒼穹の透き通った明るさを湛えた空。地中海に隣接することや、故知れぬ程の至福の気候によって、終日、朝の若々しさ、新鮮さ、目覚めの感覚を保ち続ける、このローマの空。

窓の欄干に寄り掛かり、片手に頬を乗せ、夫人は夢見心地になって、この青色の下の空気を吸い込み、上半身は、靡くカーテンに撫でさせていた。そのとき、彼女の背後でドアが開いた。

「あの子、まだ寝ているかしら」と夫人はオノリーヌに訊いた。

「いいえ、奥様……あの、奥様、こちらにお出でになりませんこと……」

オノリーヌは微笑みながらそう言うと、女主人を自分の部屋へと導き、小さな窓から下を覗かせた。

窓の下には穴の様な中庭、そこには井戸があったが、四方の壁の中を日の光が垂直に降り注ぐに従って、輝く井戸になっていた。それに壁際には、御伽噺を思わせる色彩の小さな庭があって、果実は黄金で出来たそれの様に見え、水はダイヤとサファイアの液状なす塵の如き様相を示しているが、それはイタリア風にどぎつい青色で塗られた壁がベンガル花火の光の様に反射している所為なのであった。葉っぱの光沢、花々の煌めきの上には南欧の陽気さが掠め、揺蕩うて、静けさと暑さの中でざわめいていた。また、蠅たちの飛翔は、代わる代わる緑の上では白く見え、白の上では黒く見え、空中で縺れ、或いはそこで滑翔し、羽は、大気中に浮かんだ幸福の微粒子同様、微かに振るえていた。――樹墻の一本のオレンジの木、焼いた赤土の大きな鉢に植えられた小さなレモンの木々、オルヴィエート産ワインの空のフィアスコが幾つか、その隣には靴磨き用のブラシが吊るされている葦で出来た葡萄棚の一部には、雪玉に似たガマズミ属の花が這い登っていて、然しそれが、この庭の全てであり、外れには岩で覆われた壁龕の上部から澄んだ泉が、古代の墓の破片の中に滴り落ちていた。

ピエール＝シャルルがそこにいた。自然、水の方へと引き寄せられていた。そうして、破損した溝の付いた大理石の破片の上に乗って、その小さな体の丸みの濡れた箇所に寝巻きを張り付け、両腕は肩まで袖まくりし、足

には踵の高いボタンブーツを、ボタンを掛けずに履き、頭を少々、人造石（ロカイユ）の上に凭せ掛け、垂れさがる植物と頭髪を交わらせ、壁龕の中に、差し上げ、近付け、開かれたその両の手の窪みに泉を受け、不動で行儀よく、殆ど厳粛に、手の指の盃に集まりつつ溢れる水をまた零し、彼自らの姿でそこに置いた、魅惑的にして子供っぽさもある湧き水脇の像と言った、彼の可愛らしい姿勢（ポーズ）には、ある種の感情が込められていた。

五

「ピエール＝シャルル！」と母親は、窓から息子に向かって叫んだ。子供は素早く、湧き水から跳んで離れ、階段を駆け上がり、直後には、冷たい体で、湿った花の匂いをさせ、息を切らし、紅潮して、母親の両腕の中におり、体を押し付けられた母は顔に、目に、腕に、手にキスをして、息子の寝巻きの様々な箇所を、小動物の様な優しい愛撫、殆ど舐める様な接吻で覆った。

「さあ、オノリーヌ、急いで息子に服を着せましょう……今朝は、わたくし、調子が良いので……わたくしたち、一日中、お出かけする予定ですの……今日は、わたくしの息子におめかしさせてあげなくては」

そうして、身繕いが始まった。母親は子供の首元に、当時流行の例の飾り襟（コルレット）の一種を結わえて、白いリネンの丸襞飾（まるひだ）りがとてもきっちりと子供の頬を縁取った。オノリーヌに手伝われて、母は息子に何時ものスコットランドの長靴下、黒いビロードの膝丈のズボンを履かせた。坊やはされるが儘になり、深い、殆ど瞑想的な喜び、この年頃の少年が持つことのない重々しい幸福感と共に、身に付けさせられるものを見詰めていた。息子はいつものビロードのジャケットの袖に腕を通した。母は息子の首に桜桃（さくらんぼ）色の絹のリボンを結び付けた。それからオノリーヌは少年に踵のある短靴を履かせ、頭には、羽飾りとして、スコットランドのアザミの花をあしらった銀の

ホックで留められた鷺の羽が付いた黒いビロードの縁なし棒を乗せた。子供は服を着終わった。――母親の趣味が編み出した、芸術的にして、少々芝居がかったこの衣装に身を包んで魅惑され、息子は自分自身を尊重する様な面持ちをしていた。

「ねえ！　オノリーヌ」とジェルヴェゼ夫人は、その指を子供の飾り襟（コルレット）と首の間に通しながら言った。「家主のご婦人たちは、まあ人柄も良い方たちの様にわたくしには思われますわ。ところであなたは何かお気付きかしら」

「あのご婦人方で御座いますか？……ですが奥様、私にはあの方たちが仰ることが何も分からないものですから……フランス語を話していた若いほうの方の言うことでさえも……」

「すぐに分かるようになるわ……あなたは頭が良いんですもの、それに……」

「まあ！　奥様！」とオノリーヌは言ったが、そこには、自分と他の人々の間に、自分の話さない言葉遣い、決して分かり得ない言い回しが持つ、埋まる事のない懸隔を感じる庶民の女の悲しく深い落胆が込められていた。

「まあ！　かわいそうに、オノリーヌ、わたくし、おかしなことは言っていないことよ……何故わたくし達がここにいるのかは、あなた、お分りでしょ……」

「よく分かっています、奥様、よく分かっていますわ」

そう言うとオノリーヌは頭（こうべ）を垂れた。「奥様を非難する積りはございませんわ……奥様は私が世界の果てまで付いて行く積りでいるのをよくご存じじゃありませんか」と言葉を継いだ。そして興奮して夢中になり、「わたし、あなたが、私の為に尽くしてくれたあなたがいなければ、わたし、お子さんがいなかったら！」

女中は子供を摑んで、殆ど乱暴に自分に押し付けた。「わたし！……わたし！」とまた繰り返した。

「オノリーヌ！　あなた、何を言ってるの！」とジェルヴェゼ夫人は言い、片手を伸ばすと、女中はその上に縋（すが）り付いて、わっと泣いた。

「被る帽子を取っていらっしゃい……さあ！　行きますよ……」

女主人は女中が行く姿を見詰めて「おかわいそうに」と、とても低い声で独り言ちた。

ピエール＝シャルルを身籠ったことが分かった時分、ジェルヴェゼ夫人は、自身を育ててくれた老女中を失うことになった。すぐには適当な代わりが見付けられなかったので、見付かるまでの間、週に、日中二、三度やって来て、家に慣れている女の労働者を雇い入れた。しばらくすると夫人は、既に顔見知りのこの娘の中に、自分好みの気配り、注意深さ、品のある身嗜み、手際のよい仕事振りを認めた為、新しい女中として雇った。出産の際には、十日間に渡って、夜通し寝台に寄り添い、助けたオノリーヌの献身に夫人は感じ入った。医者が、危険な時期は完全に過ぎたと明言した日、夜になって夫人は、自分の部屋に不幸そうな表情で入ってくる女中を目にした。オノリーヌは夫人に、騙す気は少しも無かったと言い、オランダの銀行家の妻、ワイナント夫人宅での窃盗事件の際、自分は居合わせたが、無実である事は明らかだと認められ、無罪とされた。が、そうなるには、彼女は女窃盗犯たちの牢獄に入れられ、憲兵に左右から挟まれて、被告席にも着く必要があった、と語った。またそう話しつつ、そのことをどうやら自身、恥続けている様子も見受けられた。それ以降、同じ家にまた雇ってもらうよう試みたものの、「証言」をしてしまった後は、彼女はもう家に置いては貰えず、それで日雇いの仕事をせざるを得なくなったと語った。

この告白に対し、オノリーヌの看護に金銭で報い、事足れりとしたジェルヴェゼ夫人の初動は良くなかった。その後、自身の体調が優れなかった期間にこの娘の存在が、自分にとって何であったのかや、他の件での感謝の思いをめぐり、夫人が彼女に負っていることを考え直してみると、誤審で救われたのではないかとこの不幸な娘を責めたい気持ちになりかかった自分に、顔を赤らめた。彼女は夫の知人の、事件の審理をした裁判所長に情報を求めてみたが、オノリーヌの無罪は疑いようもなかった。その点、女中の方は、ジェルヴェゼ夫人の身の回り

の世話をし続ける中で、命を賭してもと思える存在になり、世論を物ともせず、彼女を守ってくれたことを、女主人に感謝した。夫人の家にいる時は幸せであるものの、自分に伸し掛かっていた疑いや不公平、世の中全体に対する小量の苦い感情は、心に蟠った儘だった。彼女は決して忘れることはなかった。そしてしょっちゅう、あの日、陥ったのと似た、押し殺した感情の神経性の発作となって、打ちひしがれた心の突発的な激発とでも言うべきものが涌いて戻って来るのだった。自分は正直者であるという誇りを、裁判所の長椅子に置いてきてしまったと彼女は思っていた。疑惑の、そう言っていけなければ、少なくとも彼女の様な「裁判にかけられる女」に対する偏見の残り香を、ぼんやりと感じていた。無罪放免が、終生続くある種の穢れをそそいでくれたとは、彼女自身の目には映っていず、その穢れの幾何かは受け入れていた。

それ故に、彼女はけして結婚を望んだ事がなかった。彼女の唯一の愛情は、この母親とその子供に向けられていて、この二人の存在に彼女は身も心も捧げ、本当に身を預け、地獄までもついて行く覚悟で、二人を汲々とした、熱狂的な、飽くことのない愛で包んでいた。これらの感情は、彼女の若くて綺麗な、が、彼女の過去と人間不信の苦しみの重みで、やつれ、ひきつり、こわばって、殆ど敵意があるかの様な顔付きの上に、全て現れていた。それで彼女は、この母親とこの息子の後に従いながら、近付き過ぎる者たちには噛みつく用意がある、献身的であるが、喧嘩っ早く、すぐに噛みつき、キャンキャン吠えるありがちな犬どもと似通った風貌を持っていた。

オノリーヌは、戻って来ていた。

ジェルヴェゼ夫人は彼女に、「広場に馬車をお呼びなさい」と言った。

六

「公共広場（フォルム）まで」とジェルヴェゼ夫人が言った。

小型四輪馬車は、店舗、大建築物、教会が並んだ目抜き通りを街の中心に向かって行き、それから狭い道（ヴィア）に入った。そして突如、広い空間が開けたが、それは打ち捨てられた小平原、空き地、草が短く刈られた埃っぽい土地であった。

御者が馬たちを止めたので、ジェルヴェゼ夫人は、機械的に、衝動的に立ち上がった。

それは「雌牛（カンポ・ヴァッチーノ）が原」であった。崩壊した神殿から生き延びた柱廊、今はもう空以外、寄り掛かる物のないぽつんと離れた列柱、イネ科植物が皇帝たちの名前を浸食しているエンタブラチュアを支える、破壊し尽くされた円柱、二十世紀の間に、二十ピエ*、土に埋もれた凱旋門、建造物の大小の破片で塞（ふさ）がった溝、崩れ落ち、透かし彫りの様になった向こうに、昼の青空が見える格間（ごうま）から成る、聖堂（バシリカ）の巨大な穹窿。——戦勝者たちの轍（わだち）が窪ませ、諸民族の絶えざる歩みによって擦り減った、冷えた火山の舗石、溶岩石の塊の、大きな板石が敷き詰められた「聖なる道（ウィア・サクラ）」の端に行き着く。——こなたには、石材に塗られた金が朽ち果て、あなたの教会の前には、風化した異教の大理石、時の経過に擦り減り、剝離して、艶のない、衝撃の傷のある、甲冑の様に切り込みがあり、古木の様に大きな穴の開いた、雲母大理石の柱身。——至る所、稀に見る、宗教関係の、壮麗な廃墟があり、その上を錆色の水や夜闇の炎、火災と洪水、人類と神の全ての怒りが通り過ぎたかのよう——そういったものが、ジェルヴェゼ夫人が最初に、その不滅の威光の中で目にした、古代ローマであった。

愚図（ぐず）つく我が子の手を引きつつ、疲れも知らず、長い間、彼女は散歩した。

それから公共広場（フォルム）の外れで凱旋門を過ぎ、コロッセオに行った。彼女は、隙間はあるが、巨大な地下墓所を思わせる、ゲルマン民族の猛烈な攻撃も、ミミズの穴ほどしか切り込みを入れられなかった、キュクロプス式に四角い石を積み上げたあの弓形部分の上にある巨大な階段桟敷を支える、例の回廊の下を歩いた。軈（やが）て彼女は、闘技場の中にいた。

そこでは、陽の光が熱かった。彼女は、円形競技場を一周する形で配置された、魚鱗模様の絵が施された、小さな祭壇のうちの一つから落ち掛かる細い影の中に行って座ると、広大な円形競技場を見渡し、まずは、視覚も思考も圧倒されてしまった。

鳥たちは、桁外れに大きい石の巣の中を、和やかに飛んでいた。そこでは、ただマーガレットの花の大きさ程にも、露ほども、その血の滴らなかったところだにないが、どこにでもあるのと同じどうでもよい草が生えていた。階段席はどこも岩山の急峻さであった。荒廃した桟敷席は淡黄褐色の穴に戻り、ローマがライオンを探しに行って、主権者たる市民のローマの民を喜ばせようと、砂漠を衰微させた、アフリカの洞窟そのものの様であった。木々が生え、茂みが林立して腰掛けから腰掛けへと這い上がり、八十ピエもある陰の穴を飛び越えていた。廃墟は、自然に戻ろうとしていたが、それはローマで、岩山に戻った石材、石材に戻った大理石、洞穴へと変容している共同浴場、地面に埋もれて平らになった宮殿、低木の根っこによって破裂させられている丸屋根、雀の嘴から落ちた穀粒一つと好対照をなす岩塊群、無尽蔵の山の中腹に於けるが如く、石を探しに来る者もいる採石場と化した円形闘技場、それ自体が埋もれている墓所、小石へと姿を変えた群像らと共に、廃墟が自然に帰るのと軌を一にしている――それらは「永遠の都」の上の永遠の大地の要求と奪回の全容であった。

＊ ピエは昔の長さの単位で、一ピエは約三二四・八ミリに相当する。

少しずつ、ジェルヴェゼ夫人は、厳しい瞑想、深い沈思黙考の中へと沈み込んで行った。読書の思い出が沸き立ち、幾つもの歴史に纏わる頁が記憶の中で蘇った。ゆっくりと、彼女自身の中で、その場で次々と起こったことが想起された。実に生き生きと、人間精神の両端、両極の様な、死を見る者の興奮と死ぬ者の狂気とが交錯した、あの巨大な舞台が甦った……。彼女が夢見心地になり、夢想に耽っていると、残酷な場所の雄大な休息を叫び声が引き裂いた。襤褸（ぼろ）を着たいたずらっ子たちが、自分たちの足の音を立てる胼胝（たこ）を、巫女の寛衣が触れた階段席に、または葬儀の女神門（ポルタ・リビティナ）のトラバーチンの丸天井（ヴォールト）の上に押し付けながら、蜥蜴（とかげ）を追い掛けていた。

宵になると、彼女には昼間のことが思い出された。息子は就寝し、すやすやと眠りに落ちていたので、彼女は、また公共広場（フォルム）を見ようと出かけた。

彼女はカピトリウムの丘に登る階段状になった道の手摺に凭れた。彼女の影は、セプティミウス・セウェルス皇帝の凱旋門の壊れた縦溝（フルーティング）の上に、くっきり浮かび上がった。そして、ある種の憂鬱な物思いに迷い込み、彼女は闇に沈んだ素晴らしい装飾を、動かざる廃墟を、それらの闇の深さを、それらの揺るぎない荘厳さの上に落ちた厳かなる夜の眠りを、三本の円柱の集まりの上のカピトリウムの丘の光沢のある黒い影を、空とその星々を遮る空間を背にした柱廊玄関（ポルチコ）のひときわ大きく見える尊厳と人気（ひとけ）なき孤独を眺めていた。遠く、大きな凱旋門の曲線の下、夜の照明の間で、死者の魂の谷と言おうか、死後の楽園（エリュシオン）や、ウェルギリウスを思い出させる散歩道とでも言いたくなる場所が白くなって、たまに通る小道の散歩者がかすんで見えていた。だから、崩れかけてはいるが、不朽であり、時の流れに無頓着な遺跡の足元で、硬い鑿（のみ）を思わせる鋭い鳴き声で、秒を刻む一匹の蟋蟀（こおろぎ）がいなければ、そこでは全てが眠りに落ちていたことだろう。

翻訳は、以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Madame Gervaisais*, Gallimard, coll. Folio, 1982, p. 76–84.